

革命への投企／革命からの投企——沖縄青年層の見た辛亥革命と大正政変

(東京大学大学院) 與那覇 潤

I. はじめに——沖縄から辛亥革命を見る意義

かつて琉球王国として中国に朝貢していた沖縄の人々のアイデンティティは、いつの時点で「中華世界」を離脱したのか——本稿はこの問いを、沖縄人にとって「日本人になること」とはいかなる経験だったのか、というもう一つの命題とともに、考えるものである。特に植民地期台湾を対象とした研究で、この二つの問題の表裏一体性が近年注目を集めているにも関わらず⁽¹⁾、「帝国日本」の他の地域ではあまり論じられていないように思われる。

1879.3-4の「琉球処分」以降も、「琉球救国運動」を展開した清国亡命者をはじめ中華体制への復帰を望む沖縄人が多く存在し⁽²⁾、その希望を打ち砕いた日清戦争を沖縄史の転回点と見る歴史観は、清国派の蜂起を想定して戦時中に県内で展開された軍事訓練を象徴としてしばしば提示される⁽³⁾。『琉球史の趨勢』(1911.7)で「何人も大勢に抗することは出来ぬ。自滅を欲しない人は之に従はねばならぬ。一人日本化し二人日本化し、遂に日清戦争がかたづく頃にはかつて明治政府を罵つた人々の口から帝国万歳の声を聞くやうになりました」⁽⁴⁾と述べた近代沖縄の思想家・伊波普猷の歴史像、つまり軍事的な暴力の帰結として沖縄人は中華世界と切断され「日本人」に改造されていったとする「伊波史観」は今日もなお、ポストコロニアル的な沖縄研究のスタンダードをなしており⁽⁵⁾、就学率の上昇や徴兵令施行(1898.1.1)を重視する社会史の見解もまた、同様に日清戦争を分水嶺としている⁽⁶⁾。

しかしその日清戦争以降、「琉球処分」以上に

苛烈な掃討戦を経て日本に編入された台湾では、帝国内部での自治権獲得を目指す台湾議会設置運動が高揚した「大正デモクラシー」の時代にあっても、一方で「中国国民革命」への期待が持続していた⁽⁷⁾。所謂「日琉同祖論」の存在によって沖縄の日本編入を説明する歴史記述も⁽⁸⁾、日中両国民を包含可能な「同文同種論」の存在を考えると説得力に欠けるだろう。沖縄(人)の中華文明からの離脱と日本化の原因を単に暴力や権力側の言説への従属、現状追認としてのみ把握するのでは、同一帝国内の他地域との比較を組み入れた東アジア大での近代史像を構築することはできない。

もちろん近年指摘されるように琉球弧の内部にも多様な地域や文化が存在しており、それら総てを一枚岩としての「沖縄人」に括って、「いつ日本人になったのか」を問うことには無理があるだろう⁽⁹⁾。そこで本稿では、従来日本への同化に最も批判的な勢力であった『沖縄毎日新聞』(1908.12.10-, 以下『沖毎』)の青年執筆者層に焦点を合わせ、彼らをも「日本人」たらしめた力とは何であったのかを解明していくという戦略を採る。さらにこれを、冒頭に掲げた「中華世界」からの離脱というもう一つのアспектから把握するために、旧来よりその同時代性が指摘される中国本土の「辛亥革命」と日本内地における「大正政変」について⁽¹⁰⁾、当時の沖縄県民たちがいかなる眼差しを向けていたのか、を検討していく。

中国研究では早くから辛亥革命の実態の解明が進み、近代的な意味での「革命性」の有無が批判的に検討された結果、「孫文ら愛国の志士に主導された国民革命」といった歴史像は過去のものとなり、むしろ伝統中国との連続性の方が注目され

る傾向にある⁽¹¹⁾。しかしながらそれは、革命という言葉が同時代的に持った意味を否定するものではない。清末の中国で近代化や国民化を語る言説群が、フィリピン革命やボーア戦争など同時代の第三世界の情況への言及を通じて産み出されていたことが指摘される現在⁽¹²⁾、逆に琉球弧という「かつての朝貢国」の側で「革命」がいかに眼差されていたかを明らかにすることは、中国近代史と沖縄近代史との間のミッシング・リンクを埋めるという点でも意義があろう。

『沖毎』は15年近くにわたり県政を恣にした奈良原繁知事が退任した1908年、既得権益勢力としての旧都首里に対する商業地区・那覇の勃興を背景に誕生した新聞である⁽¹³⁾。したがって本稿では比較対象として、奈良原と結んでいた首里の旧支配階層を母体とする最初の県内紙『琉球新報』（1893.9.15-、以下『琉新』）をもあわせて取り上げる。太田朝敷（1865-1938）を主筆とする『琉新』に対し、『沖毎』は山城長馨（翠香、生没年未詳）・伊波普成（月城、1880-1945。伊波普猷の4歳下の弟）・島袋全発（1888-1953）などの若い執筆陣を抱えており、その日中観にも世代や知的背景の差異に起因する大きな相違が認められるためである——事実、沖縄思想史では、辛亥革命に半年先立つ1911年4月の所謂「河上肇舌禍事件」の際も、日本に対する「忠君愛国」よりも沖縄の個性を全世界で発揮することを優先せよと説いた河上を『琉新』が同化主義の立場から非難したのに対し、『沖毎』はむしろ擁護の論陣を張ったことが知られている⁽¹⁴⁾。なお両紙とも内地新聞からの転引記事が多いため、本稿では各紙の独自性が顕著に表現されている社説欄およびコラム記事——『琉新』では『金口木舌』（以下『金口』）、『沖毎』では『机上余瀝』（以下『机上』）・『粗枝大葉』（以下『粗枝』）および編集後記にあたる『編集日誌』（以下『日誌』）——を主たる分析対象とする。

Ⅱ. 第一革命期（1911.10—1912.3）

1. 『琉球新報』——古典的中国観と傍観論

周知の通り、辛亥革命は1911（明治44・宣統3）.10.10の武昌での反乱から始まった。以降11.13の袁世凱の清国内閣総理就任を経て、12.3に英国の仲介で南北停戦が実現する。1912（民国元）.1.1には中華民国が成立し孫文が臨時大総統に就任、2.12に宣統帝溥儀が退位して清朝は滅亡するが、袁と孫の妥協により3.10には袁世凱が臨時大総統となった。

まずは、対照事例である『琉新』の第一革命観を押さえておきたい。端的に言えばこの時期の『琉新』の態度は「共和制にしようが君主制にしようが〔其〕辺の詮議は支那人に任せたが宜い、余計なお節介をやつて事端を招く程馬鹿な〔話〕はなかりう」（1912.1.6『金口』）という局外中立論であった。それを支えていた要素は以下、順次分析していく通り、①革命や共和政体を中国の伝統に則して捉える古典的中国観、②欧米列国の干渉を懸念する国益思想、③隣国の動乱に影響されない日本の「国体」への自負心、だったといえる。

1911.10.19のコラム『金口』に「元来支那人は筒井流が得意であるから若し討伐が長びく様な事になつたら無意味の暴徒が四方に蜂起して納りがつかなくなる」、10.24にも「支那の人民はよく妖言に惑はさるゝ、変乱の時には昔からあることだが」と見える通り、『琉新』は清国の動乱を一体的な民族革命として把握するというより、日和見がちな「支那人」には「昔から」ありがちな「無意味の暴徒」の連鎖反応として冷めた目で見ている。それは10.21の『金口』が清国情勢を「三国時代」に喩えているように、辛亥革命を近代的なナショナリズムの発現というより、むしろ中国に伝統的な群雄割拠の騒乱と捉える視点に基づいたものだったといえる⁽¹⁵⁾。そのような態度は中国に対する後進国視とも結びついており、11.17の

『金口』は「水滸伝」を引きながら「各省の独立云々の報道杯文字から見ると仰々しいが実際は本県の田舎辺で村民が寄合つて何か極めて仕舞ふ位ひの事だらうよ。立憲とか統治権とか或は秩序とか保護とか外交とか云ふ語が流行るから開けた様に見へるが、都会から少しく入りこむと水滸伝と大した相違はあるまい」と論じている。

無論、『琉新』の記者として辛亥革命の近代性や思想性に無知だったわけではなく、11.25の『金口』は「共和を主張するは武装革命党を中心とせる一派で立憲を主張するは袁内閣を中堅とせる清国官辺の一派である」と、清国情勢を共和制と立憲君主制との間の政体構想をめぐる対立として把握してはいる。しかし「支那は乱れ易く治ま[り]易い国」(12.1『金口』)・「支那人は一体が雷同し易い国民」(12.15『金口』)といった、民衆の主体性の欠如を強調する中国観の下では、同紙にとっての最重要課題は安定した統一政権の樹立であり、思想的対立は単に中国人には解決困難な、秩序回復の阻害要因としてのみ扱われることとなった⁽⁶⁾。社説「清国の前途」(11.8)が「清国の改革が立憲君主制なると共和制なるとに関せず其の統制力の微弱なる時は到底動乱の断つ事なかる可く…若し夫れ清国問題が一転して列国の問題となり世界の動乱ともなれば我国は勢ひ国際上の難局に立たざる可らざる」と説いたように、『琉新』にとって重要なのは欧米列強に介入の口実を与え日本を「国際上の難局」に巻き込まないような、「統制力」のある国家の有無のみであり、その政治体制については関心の対象外であった。それは「仏朗西の革命党がルーソーの民約説にかぶれ共和政治を標榜して立ち首尾よくルイ十六世を倒したが其結果は矢張り帝政が立派に出来あがつた…支那の革命騒動も矢張り仏朗西の轍を踏むかも知れない」(11.11『金口』)といった近代革命一般に対する懐疑とともに、「支那では読書人の中には随分慷慨家も居るが一般人民の立憲にならうが

共和にならうが一向頓着はない」(12.1『金口』)といった中国の「一般人民」に対する蔑視にも裏づけられていた。

もっとも、政体問題への無関心は裏を返せば共和政府の容認にもつながるものであり、同時代の中国を「三国志」の世界と同列に扱う『琉新』の古典的な中国観は事実、「漢の高祖の如き亭の長から成上つたのだ、亭の長と云へば片田舎の村長だから土台共和的の国柄だ」(12.27『金口』)・「支那の国体は元来共和的に出来て居る」(12.30『金口』)といった形で、中国史の文脈によって共和制を基礎づけるという側面も持っていた——実際、『金口』は「革命と云へば直ちに仏朗西の革命を連想させるが支那こそ太古からして革命の本家だ」(1912.2.6)とさえ述べている。無論『金口』の論調自体は『琉新』の同化路線を反映して、「我国は威張たものだ…全世界が騒乱病に罹つても毅然として揺ぎもない」(11.3)・「世界各国の国情を見渡して見給へ、いよいよますます我国体の有難みが感じられる」(12.31)といった、中国を始めとする動乱の世界情勢との対比において「我国体」の例外的堅牢性を賛美するものだったが、それは一方で、中国からの革命・共和思想の「悪影響」への警戒論を「日本の国民思想に影響するなんて日本の国体はそんな薄弱なものではなからうし、又た政治上の御指南を支那人に仰いだのは昔の事だい」(1912.1.6)と一蹴するような、中国への過剰な干渉志向に対する解毒剤としての機能を果たしてもいたのである⁽⁷⁾。

これらの論調の行き着くところは結局、現状維持策としての袁政権承認であった。政体問題よりも政権安定を重視する『金口』は早期に「袁世凱の遣口の如何に依つてはナポレオンの株が此人に落るも知れない」(11.11)と予想し、事実袁が実権を握り和平に乗り出すと「袁内閣の講和条件と云ふものを見るに…彼の通りの政体なら皇帝は多くの虚器だ、それでも共和政体でないといけない

と頑張るなら世界の同情を失ふことになる。のみならず此辺で大人しく切りあげないとそれこそ外国の干渉が入つて清国の不利は尠少ではあるまいテ」(12.13)として革命党の抗戦をあっさり否定していた。同欄は王室の処刑を伴わない平和裡な「禅譲式」による清朝滅亡を「支那人の思想が仏朗西の革命時代からすると幾分か進歩した点がある」(1912.2.21)と賞賛し、「支那の革命党は多年文明国人の中を流浪した丈けあつて党中の有力者は総て権勢に対しては淡泊の様だから、袁世凱さへ野心を抑へて居たら余りヘマな事を仕出来すまいテ」(同日)として第一革命を肯定的に総括したのである。

2.『沖縄毎日新聞』——「革命」への没入とその挫折

これに対し『沖毎』の場合は、相当情熱的な「革命軍」側への共感が見られる点に特徴があり、それは青年執筆陣の沖縄、ひいては日本社会に対する批判意識に根ざしていた。例えば山城翠香は1911.9.14の『机上』で「過去に於ける日支両属の関係上勢ひ両股的政策より生じたる奴隷根性…は今猶ほ琉球民族の心意の一切を支配して、時々卑屈なる意気地なき醜態を世上に暴露して自ら悟らざるが如し」と「琉球民族」の「奴隷根性」を批判していたが、9.16の同欄では日本内地の西洋崇拜熱を「日本[は]精神的に外国人に征服されたるものにして、然かも琉球民族が屢々他府県人に征服されしに何んぞ、夫れ相似たるの兄妹なるや」と論難し、精神的主体性の欠如を「兄妹」たる日本人にも当てはまる欠点と位置づけている。冒頭で触れた「河上事件」における両紙の差異からも予測できる通り、『琉新』が中国動乱の影響を受けつけない日本の「国体」の優秀性を確信していたのに対して、『沖毎』の記者たちはそもそも「日本」なるものが有する価値を懷疑し、辛亥革命の衝撃が及ぶことへの期待を表明してすらい

のである。以下、そのことを順に見ていこう。

同紙編集者の赤裸々な心情が窺える『日誌』欄を追うと、まず11.2に「菊翁腕をコスリながら孫子一卷を携へ革命軍に飛び込んだら功名掌中にあると吐かす、僕も行きたい」と見える。11.19には同僚について「こんな肝ッ玉では革命などは覚束ない」との評が載り、11.28には「月城君が這入つて来た、中清の動乱を単に人種の争ひと見るのはあやまつて居る、孫[文]黄[興]などはそんなつまらない人物ではない…革命も平和に至るの過程であるから時としてはただやる必要があるので、殊に旧人や老人がいばつて居る社会では革命の必要があるのださうナ」とある。また12.5の投書欄『葉書一括』には「汀君は愈々新郎となつた、今の彼は革命党の黎元洪や黄興よりも得意の時代」との投稿が見えるが、12.11の『日誌』に「新婚者の汀鳥が来て…」とある通りこの「汀」も編集部の知人であり、沖縄の青年インテリの間で「革命党の黎元洪や黄興」が一種の文化的ヒーローとして眼差されていたことが窺える。12.20の『日誌』は「月城君が酒杯を挙げつゝ支那革命の状況を話してゐる」、12.21も「併し革命軍の財政状態はどうだ…彼れでも旨く遣つてゐるぢや無いかとキク翁が又気焰を吐く」と伊波月城と「菊翁」の革命への変わらぬ傾倒ぶりを伝え、12.22には「黒旋風」が「吾輩はレボリユウシヨナリーだから革命軍に同情をよせるのだ、満朝のやうに専制的のものは国家でも社会でも亦個人でもはやくくだばつて了へだ」、12.24には「花和尚」が「革命党万歳、新人万歳、西園寺内閣万歳」と『日誌』に記している。

伊波月城の言とされる「旧人や老人がいばつて居る社会」や、「黒旋風」の「満朝のやうに専制的のもの」はむろん、彼ら自身の暮らす沖縄の社会を指している。1912.2.2の『日誌』に「黒旋風」が「支那のことが話に出ると何だか行きたくなつてたまらなくなる。しかし此処の掃除もまだ出来

てゐないので行くわけにはいかぬ。沖縄の小天地を何時までも老人や旧人に占領されてはたまつたものでない…青年諸君協同して開拓しやうではないか」と記しているのはその最も明快な表明だろう。「支那のこと」への共感を通じて「此處の掃除」を鼓舞する彼らの心情は、しばしば『日誌』を超えて論説にも滲み出た。1911.11.19の社説「破壊と建設と」（山城翠香）では、「破壊は必ずや建設を予想し建設は必ずや破壊の手を藉らざる可からず」ということを説くために「支那に革命起りしは結局、満人と漢人との意志の衝突なり…漢人の意志の活動は遂に満人の現廟堂を破壊して以て漢人の新しき建設を肇めんとするにあらずや…コレ最近隣邦に起りたる破壊と建設との二能力たる原〔理〕の一実例を示したるに過ぎず」と辛亥革命を例に引きつつ、「情実を打破し被弊を去つて紊亂を整え社会進運に積極的向上を欲する者は、須らく右手に破壊の鉄槌と左手に建設の鋭鑿を持して、先づ自らの足下より始めざる可らず」と論じている。

「黒旋風」の「レボリュウシヨナリーだから革命軍に同情をよせる」という言に表れている通り、彼らにとって「革命」とは近代西洋的な Revolution に他ならず、『琉新』が見て取った中国古代史の通例としての「革命」ではなかった。「黒旋風」は1912.1.1の『日誌』にも「カーライルの英雄崇拜論のどこかに仏蘭西革命のことが書いてあつた。其中に革命などはこれでおしまひにして貰ひたいとの希望をのべてあつた。所か彼の死後七八十年の今日又々革命がおつぱじまつた」と記し、辛亥革命への共感が「仏蘭西革命」を媒介にしていたことを示している。この点もまた、『琉新』が「箕作〔元八か〕博士の仏朗西革命を見るに…何處の国何れの代に於ても革命運動と云ふのは畢竟群集心理の発作に過ぎない」（1912.3.2『金口』）と「革命運動」を「群集心理の発作」に還元し、国王処刑やジャコバン独裁のような「聞

くも恐ろしい恐怖時代」（1912.2.21『金口』）への帰結を強調するなど、常に「革命」の否定的な面を示すために「仏朗西革命」を引いたのとは対照的であるといえる。

琉球人と日本人に共通する主体精神の欠如を批判していた山城翠香は、このような近代革命への情熱を背景に、社説「支那革命は対岸に如何なる思潮を東漸せし乎」（1911.11.27）で「対岸の火は只に我が国是に影響し国体を汚辱するの絶対に無きを断言する能はず…コノ如き新思潮がその対岸なる我が国の沿岸に東漸し来りしは現代西洋文明に心酔したる大和民族の屈從的箇性を刺戟したる所、豈に僅少たらずと〔せ〕んや」と述べて、中国革命が「現代西洋文明に心酔したる大和民族の屈從的箇性を刺戟したる」ことに明白な賛辞を送っている。そして「日本人が自らの国家を忘却して人間自由意志の実現地たる隣邦の一大帝国の危機存亡を觀察するの心持ちなり、斯の心持ちを味へば総て革命の思想と為る」とある通り、辛亥革命を「人間自由意志の実現」として把握し、日本という「自らの国家を忘却して」までもその進行に見入る共感の姿勢を、「革命の思想」として読者に提示せんとしていた。

そのような期待を「革命軍」に向けていた彼らにとって第一革命の進行は希望に沿うものでなく、袁政權の成立をもって上出来とした『琉新』とは対照的に、次第に苛立ちを示す表現も目立ってくる。「レボリュウシヨナリー」を自称した12.22の「黒旋風」の『日誌』は一方で「今にも降り出しさうで容易にふらない、あたかも清国の時局に似てゐる」とも記していたし、年が明けて1912.1.11の『日誌』の「〇〇君曰く本年は支那の革命の祟りがあるさうだから大いに用心せんとどんな災難に遭ふか知らんと」という揶揄的な表現からも現実の「支那の革命」が不首尾であるという認識が伺われる。1.30の『日誌』は直接には辛亥革命を扱ったものではないが、「武勇に関する

話がおつ始まつたが間もなくそれも止んでしまった。沖縄人はつまるところ平和の民なんだ、誰れかゞ死にたいといった、とうとう酒をのむことにした」という編集部内の様子を記している。「武勇」を振るわんとしてもその展望を持てない、当時の沖縄青年の煮詰まった絶望感が示されているというべきだろう。

Ⅲ. 第二革命期 (1913.7—1914.1)

1. 『琉球新報』——中国観の構造転換と衆愚政治への警鐘

袁世凱独裁に帰結した第一革命への反省から、1913 (大正 2・民国 2) 7.12 に開始された反袁闘争を通常第二革命と呼ぶが、即座に鎮圧され 10.10 には袁が正式に大総統に就任する。この間 9.1 に南京で清朝復辟派の張勳による邦人殺害事件が起きると 9.5 には外務省の阿部守太郎政務局長が暗殺され、9.7 には対支同志会主催の国民大会が日比谷で出兵要求を決議するなど、日本内地では対外硬派の民衆運動が続く。一方同年 2.11 には第一次護憲運動によって第三次桂内閣が倒れる所謂「大正政変」が発生していたため、日本内地でも両国の民衆運動を重ね合わせる論説が登場するのがこの時期の特徴である¹⁸⁾。なお前年 1912.3.29 の勅令 58 号による沖縄本島への衆議院議員選挙法施行に伴い、沖縄県は同年 5.15 の第 11 回衆議院総選挙に初めて参加し¹⁹⁾、(離島部を除き)参政権では内地と同様になっている。

このような日中両国の情勢転換は、『琉新』・『沖毎』双方の論調に大きな影響を与えた。『琉新』の『金口』は明治天皇逝去一周年の 1913.7.30 に「国民は此日を以て奉悼の誠意を表すると共に新しい覚悟を以て大正の新時代に移らねばならぬ…日本は宇内の進運に伴ふて百事日新の必要がある、夫だから我國民は諒闇明けと全時に名実共に新時代の新生活に入る覚悟が無ければならぬ」と記し、「大正の新時代」を「宇内の進運に伴ふ…

百事日新」がなされる「新時代の新生活」と見なす見解を提示している。その「新時代」とは具体的には同欄の「昨年末の政変以来輿論の權威と云ふものが確実に認められて来た」(8.26)・「桂公が薨去して仕舞つたから藩閥は之から年一年凋落するばかりだ、そこで日本の政治は今後段々藩閥政治から遠つて議院政治に移つて行く」(10.23)という論調に明らかなように、大正政変や桂太郎元首相の死去(1913.10.10)が象徴する藩閥専制の終焉と議会政治の興隆を指すものであり、このように「大正政変」を時代の画期と見なす志向自体は、後述する通り『沖毎』にも共通する認識であった。しかしながら当然予想される通り、この「新時代」の到来に対して抱かれたヴィジョンの方は、両紙において大きく異なっている。

まず『琉新』の紙面には、民衆思想の沸騰によって日中両国が政治的なカオス状態へ陥ることへの不安感と、それに対する防衛意識が観察されるようになる。例えば第二革命について 8.1 の『金口』が「袁世凱が幾ら革命軍に勝つても革命思想を一掃する事は出来まい…だから支那の秩序を回復して将来の禍乱を避けるには南北の大決戦に先立つて列国が共同調停をやる必要がありはせぬか」と述べているのは、同紙の第一革命期からの認識の転換を象徴するものである。ここでは「幾ら革命軍に勝つても革命思想を一掃する事は出来まい」と、いわば三国志的な実力行使の支配権争いでは抑制し得ない時代の潮流としての「革命思想」が把握され、そこから「列国が共同調停をやる必要」が導かれている。既に述べた通り『琉新』の中国論の基調は勢力均衡の観点からする不干渉論であり、同紙にとって諸外国の政治介入は本来ベストの選択肢ではなかったのだが、中国一国では制御しきれない「革命思想」の根強さが、そのような介入必要論を喚起したわけである。

つまり「革命軍」に思想性を認めるという点に関しては、『琉新』は第一革命期の『沖毎』に近

づいたわけであるが、しかしその「革命思想」の側に立つのではなく、思想問題をむしろ政治的統一を困難にする負の要因と見なすのが、この時期の『琉新』の特徴である。実際『琉新』は「感情を離れた公平の眼で見れば袁世凱は現代支那の人物中最も卓絶した傑物だ」(8.9『金口』)として袁への相対的な高評価を維持し、原則としては「支那は支那人をして処理させて見るが宜い、實力を以て秩序を快復し国内を統一する人があれば夫で結構…隣国の日本人が立憲主義や共和主義の理想を以て支那に臨むものは余計なお節介である」(9.15『金口』)と論じている。つまり政治的安定を最優先し、「理想を以て支那に臨む」ことを戒める現実主義的な観点自体は、第一革命期から維持しているのである。

「革命思想」自体を中国政府に統制不可能な騷擾要因と見る視点は、第一革命時の混乱の観察から見出された、中国への共和政治の不適合性という新たな認識を反映していた。『琉新』の常連寄稿者「鬼面仏」のコラム『活人剣』は7.19の時点で「隣邦の国情民俗は果して共和に適せりや否や…今日迄の成績に徴すれば不合格の断案は蓋し免るへからざるの〔観〕たるか如し。是れ畢竟国情民俗を忘れ能力を省みず幼少の身を以てして文明史の試験に應せんとする無謀無智の罪たるや明〔なり〕」と「今日迄の成績」に基づき、「文明史」の段階を考えればそもそも中国への「共和」の導入自体が「無謀無智の罪」であると断言する。「文明史」という西洋近代的な尺度によって中国を「共和」に適した発展段階でないと切り捨てるこの議論は、中国古典の知見から「革命」や「共和」をむしろ中国の伝統と見なしていた第一革命期の同紙の認識とは正反対の視座といえる。そしてこのような視点は、7.22の『金口』が「巴爾幹人をして巴爾幹を処理せしめよ、之が彼等の絶叫して要求した理想であつた…然るに列強の手を引いた巴爾幹の諸国は絶へず戦争ばかりして共倒れ

になるばかりだ」というバルカン情勢の観察と対照しつつ、「自から処理する能はざるもの、例はお隣りの支那がそうだ、今の有様では支那も列国が手を入れなければ無事に収まる事は出来ないかも知れない」と論じたように、『琉新』の編集部にも浸透していった。

見落とせないのは、上記のように「文明史」的な観点から編成し直された新しい形の中国への蔑視観が、一方で同時に日本人・沖縄人という自分自身に対する戒告としての意味を持っていたことである。『活人剣』(7.19)は続けて「是れ豈に惟り隣邦のみと云はんや、治国平天下の要は移して以て国より県に及ほし更に郡町村に及ほして愆らす…世の政治を議せんとするもの須らく以て戒心せざる可らず」と論じ、『金口』(7.22)もまた「金口子は平素から沖縄人をして沖縄を処理せしめよと主張する一人である…与へられた権能も監督官庁の指導を仰がなければ実行する事が出来ないやうな事があつたら支那人や巴爾幹人を笑つては居られない」と結んでいる。『沖毎』が同県民の「奴隸根性」をしばしば批判していたことは既に見たが、『琉新』もまた同じ問題を把握し、「革命思想」によって混迷を深める中国をいわば反面教師として位置づけなおしたのである。

そしてそのような自省の眼差しは沖縄県を飛び越えて、日本全体にも及んでいた。『金口』は既に述べた通り、大正初年の日本内地における世論政治の勃興を基本的には望ましいものと見なす一方で、「多数を恃み勢に乗じて当路者を脅迫襲撃するに至つては断じて立憲的でない、殊に今回の阿部局長暗殺になると…許す可らざる蛮行である」(9.14)・「近来の国民的運動なるものは決して宜い現象ではない…輿論の權威を無視する専制国ならいざ知らず、苟も今日の日本に於て一部扇動政治家の敵本主義に乗せられた野次馬の集合団体を以て国民的運動と称したり、或は之に依つて万事を解決せんとするのは国家の機関を無視し

国家の秩序を破壊する恐れがある」(9.18)と、対外硬派の「国民的運動」の暴力性に対する批判をしばしば掲載し、早くもポピュリズム的衆愚政治への警鐘を鳴らしていた。12.14の同欄の「支那の政治は支那人にさせるがよい…帝国の新聞紙中には袁を親の仇讐の様に思ふて居るものが多いがさりとて意気が逆せ過ては居まいか」という袁政権容認＝中国情勢傍観論は、第一革命期から一貫する『琉新』従来の不干渉論であると同時に、「今日対外問題に対して新聞は自由意志を緊縛され、政治家は衆愚の暴力的制裁を受け、虎視眈々たる浪人組の跳梁、政争の機会を捉ふるに殆んど手段を選ばざる反対党、之等と相俟つて外交に盲目なる国民が囂々として外交意見を發表したら誰の耳にも夫が国民の多数意見としか響かない」(10.21)のような、日本で進展中の民主化が「対外問題」に関して多数の専制に陥りつつあるという、新たな情況認識に対応した『琉新』なりの政治的判断でもあったのである。

2.『沖縄毎日新聞』——革命「への」投企から革命「からの」投企へ

日中双方について民衆思想の勃興よりも政治の安定を重視する『琉新』がリアリズムの立場を堅持したとすれば、第一革命の時点から「革命軍」への共感を顕にしていた『沖毎』もまた、自らの理想主義への信念を貫いた。そして重要なことは、かつて熱狂に近いほどの感情移入を以て眺められた中国革命が、第二革命における「理想家」孫文の敗北と亡命によって再度の行き詰まりを見せる中、『沖毎』に集う青年たちの「理想主義」がむしろ日本の「大正維新の新運動」や「憲政擁護の運動」へと引き継がれていくということなのである。「理想」を媒介としたこの逆転劇を辿るのが、本稿の主題にして最後の仕事となる。

『沖毎』は「民国は第二革命の初期に入つた」とする1913.7.21のコラム『粗枝』で「現代はモウ

専制主義の政治家が民衆を支配し得る時代ではなくなつた。それで袁と人種を同しうする政治家連は亡びに至るの途を辿つて居るやうなものだ…現代は学者の所謂民衆討議の時代であつて、東洋諸国も今其の時代に入りつゝある」と、「民衆討議の時代」における「袁と人種を同しうする政治家連」の無効性を論じ、第二革命への変わらぬ期待を表明した。同論説は「輿論も愚論である場合がないとは限らない」と衆愚政治の危険性を認めつつも「併したとひ輿論は無視することが出来ても時代精神は無視することは不可能だ」として、あくまでも民主化へ向かう「時代精神」の絶対性を強調する。これは第二革命を支える「革命思想」に注目しながらも、それに情勢不安定化要因という否定的な位置づけしか与えなかった『琉新』とはやはり対照的である。8.3の『粗枝』が「日本の支那通の多くが支那は有望でないといふてゐるのに反して、科学的に支那を観察した泰西人の多くは支那は有望の国と称して居るのも面白い」と西洋人の中国認識に依拠しつつ、「袁は必ず滅亡するにきまつて居る」と革命派の勝利を断言するのはその端的な表現であり、「世界はだんだん民衆政治の時代に入りつゝある…三国志や武勇伝のようなものばかり読んでゐる政治家は自然淘汰の結果なくなりつゝある」という結論も、「三国志」的な権力闘争論でしか中国を見ようとせず、結局袁政権の追認に至る『琉新』的な態度を批判したものと読める。

旧来同紙は『談藪』という一種のゴシップ欄で、おそらく内地からの転引によって「孫文が袁世凱を向ふに廻して立ち働らくには余に理想家過ぎるとは人々の能く知つて居る所だ」(7.4)・「孫文は理想家だけに一旦斯うと目標を定めると傍目もふらず猪の如くに進もうとする」(7.7)と、南軍の首領孫文の「理想家」ぶりを報じていたが、実は同紙こそは同時代の世界情勢を「世界は再び理想主義の時代となつた…吾徒は無理想の為政者の

没落を皇天に祈ると同時に理想ある新為政者の出現を希望することメシヤの出現をまつが如くである」(7.25『粗枝』)と認識するものであった。この「理想主義の時代」とは端的には「独逸理想主義の代表的人物…の文集や研究が盛んに出版せられつゝある」という欧州の思想動向を指すものだが、それは「時代精神」の不可逆性によって「東洋諸国」の民主化と「袁と人種を同しうする政治家連」の没落を説く同紙にとって、「理想家」たる孫文率いる中国革命派への共感をさらに昂進させる意味合いを持っていたことは疑い得ない。さらに7.25の『粗枝』が一方で「大正維新の新運動は何か故障があつたと見え途中で挫折したやうに思はれるのは実に千秋の遺恨である。併し憲政擁護の運動が下火になる前後から思想界に大活動が始まつて、思想家重に宗教家が虹のやうな気焰を吐いて居るのは為政家たるもの注目しなくてはならない一大現象である」と論じている通り、「メシヤの出現をまつが如く」に「理想ある新為政者の出現を希望する」理想主義の時代精神とは、決してヨーロッパや中国に限定されたものではなく、日本国内における「大正維新の新運動」や「憲政擁護の運動」の系譜にも脈打つものと認識されていたのである。

そして1913年の後半、袁世凱の前に崩壊していく第二革命への言及が同紙の紙面上から消えていくのに反比例するかのように、隣国の「革命」へと向けられていた「理想主義」を新たに日本への同化へ、「大正維新の新運動」や「憲政擁護の運動」への参与へと傾けるような言説が現れてくる。その嚆矢にして典型といえるのは、「赤八巻」名義で島袋全発が寄稿した「新思想に対する誤解を弁ず(下)」(8.18)の以下のような一節であろう⁹⁰⁾。

実証主義科学主義により琉球人の立場を論ずれば琉球人は日本に同化しなければ政治上経済上生活が危なかつたからフヂツボのやうに適應性により今日に至つたのだ。併し新理想主義に

よれば乖離抗争して同胞の血を流さんよりは進んで同化した方が琉球人の文化に資する、何故なれば言語人種が同一であるから同化は可能である、同化するも琉球人の個性は発達こそすれ破壊さるゝものでないからだ。前者は価値判断を無視し後者は価値判断により進路を決めるのだ、そして後者と雖も事實は事實として認識する。

島袋はここで、「琉球人」の日本への「同化」を「生活が危なかつたから」と合理的必然性のみで説明する「実証主義科学主義」の立場を退け、「進んで同化した方が琉球人の文化に資する」という「価値判断」によって正当化する「新理想主義」の立場を説く。文中で批判される「フヂツボのやうに適應性により今日に至つた」というのは、本稿冒頭で挙げた通り沖縄の「日本化」を暴力の帰結として把握する伊波普猷の沖縄史理解を指したもののだが⁹²⁾、つまり「生活が危なかつた」あるいは「言語人種が同一である」といった「事実」は立論上の基礎として承認しつつも、あくまでも自らの「進路を決める」最大要因として何らかの「理想」を据えようとするのが島袋の立場なのである。そして「琉球人の社会我もその個性を傷けらるゝことなしに国民我に抱和されたいといふのが新人の希望でなければならぬ。つまり琉球人といふことを侮辱の意味に解されることなしに日本国民たらんとするのは此場合における新理想主義の態度だ…同一憲法の下に同一権利を有すとの自覚は新氣運に乗じて最も効果ある方法であらう」と論じている通り、日本への「同化」を「理想」として語る上で「最も効果ある方法」は、大正政変以降の民主化の「新氣運」に乗った、「同一憲法の下に同一権利を有すとの自覚」の鼓舞だったのである。

同時期の『琉新』が大正を「新時代」と見なしていたのと同じく、『沖毎』も12.31の社説「大正二年を送る」に「大正二年は日本国憲政史上特筆大書す可き国家の重要事件が起つた年で、日本国

は此の年を以て時代と時代との区別期、旧日本と新日本の別路になつて居る…沖縄を眺めて見ると、此処にも大正新政に伴ふ革新が行はれたことを認めざるを得ない」とある通り、大正政変を経た「大正新政」の「新日本」に前時代よりも進歩した新しい時代の可能性を認めていた。その上で同社説は「然れど目を挙げて本県の民衆を視ると彼等は藩政時代の人民と異なるところなく…本県目下の急務は本県の民衆をして憲法治下の民人たることを自覚せしめ、彼等をして能動的に活動せしむるにある」ことを主張する。これと軌を一にしてコラム欄たる『粗枝』も「これまで思想界の問題であつた新旧の衝突は今や実生活の上にも現はれんとする新機運が到来した、旧沖縄は将さに亡び新沖縄これに代わり沖縄を料理せんとしつゝある」(12.28)・「ユダは唯物主義の人・小なる国家主義の人、キリストは大なる理想主義の人・人道主義の人、ユダがキリストを理解する事の能きなかつたのも無理はない。道を説く人よ、新時代を理解して人を説く人よ、沖縄人の民族的悲哀より出発して道を説くわが戦友よ汝等恐るゝ勿れ」(12.30)・「沖縄[人]も日本国民たる事を自覚し日本国は立憲国たる事を知つて貰ひたい」(1914.1.8)と、大正時代の「新気運」としての「理想主義」に基づいて、「憲法治下」の「立憲国」たる日本国の一員としての「新沖縄」に相応しい自己意識を持つことを県民に訴えている。

既に述べた通り、日本の「国体」を強調する『琉新』に比して『沖毎』は従来、日本的な価値観に対する猜疑心を表明しており、その傾向は1914年の『粗枝』にも「沖縄人に新しくなれとはジャパナイズせよと云ふのではなく沖縄人の人生観・世界観を一変せよと云ふことである…彼等の利己主義から出発して他愛主義になることだ」(1.3)・「他愛心は人間の情の中でも最も高尚なるもので劣等民族は他愛心が薄い…此の点から見ると日本人はたしかに一等国民ではない」(2.5)

という形で観察される。しかしながら大正政変以降の、日本が民主的な「新日本」に改まりつつあるという時代認識は、否定すべき単純な「ジャパナイズ」としての「同化」ではなく、「利己主義から出発して他愛主義になる」といった「理想」への道筋を辿る、沖縄人の自己革新としての「同化」を語ることを可能にしたのである。

そして、「立憲国」日本への同化を「理想」の実現への過程として語るという『沖毎』のこのような実践は、かつて自身が激しく共鳴した中国における「革命」の実現として、同時代の日本社会における変化を把握する地平へと彼らを導いた。「所謂二月革命後、人心は一入生気に満ち満ち活気を運び来り…官僚政治の衰頹と共に人心は新たになつた」(1913.12.31「大正二年を送る」)と大正政変を人心を一新させた「二月革命」と命名し、「自己を内省した結果自己を批評し、自己を批評することによつて自己革命を遂げねばならないのだ…廿年前の沖縄は現時の沖縄ではない、二十年前の理想は大正三年の理想とす可きではなからう」(1914.1.29『粗枝』)と改まった沖縄における「自己革命」の必要性を説く同紙の論調は、1914年夏には遂に「現代沖縄は沈黙の裏に大なる平和的社会的革命を遂げつゝあるは眼識あるもの誰れしも否認せざるところ」(7.8『粗枝』)とまで断言するに至つたのである。その結果として彼らは「明治維新の政変は其社会的変遷の点から見[る]と仏蘭西大革命以上の大事件なりとは泰西人士の評であるが、単に革命と云ふ表面上の意義を離れて真に其変動の程度に就て考へて見ると此評言の当れるを知に至る」(7.13『粗枝』)と明治維新を「仏蘭西大革命以上」の真の「革命」として捉え、維新を担った「青年志士の力」を模範としつつ「理想家てふ語は今まで侮辱の意味で唱へられてゐた、然るにこの理想家が其理想の実行に努力する結果世が変動しはじむる…今や青年沖縄は其思想の実行期に入りつゝある」と「青年沖縄」の

「理想家」たちに奮起を促した。そして大正の新時代こそは「明治十二年の政変 [=琉球処分] は沖縄人を奴隷の境遇から救ひ出したに拘らず、慣習の惰性は未だ其気分を一変せしむることを得なかった」(6.30『粗枝』)という中途にて挫折した明治期の「奴隷解放」²³を真に達成し、「大正三年は日本思想史上又は憲政史上まことに記憶す可き年であるが沖縄としても亦記憶す可〔く〕慶賀す可き年である…大正三年は沖縄人が事実 に於て自由解放されたる歓喜す可き年であるからである」とまで言わしめる程の、「自由解放」のポテンシャルを秘めた時代と見なされるに至ったのである——それは裏面で「革命的なりとはちと語弊があるかも知れないが之は東洋流の革命を意味せず、現代的革命即ち平和的非常開展又は急進的進化の事である」(6.2『粗枝』)として、王朝交代を意味する「東洋流の革命」の語義を明示的かつ完全に放棄することでもあった。

要約すれば、第二革命に及んでも『沖毎』の辛亥革命への共感を持続しており、そこには民主化の進展を「理想主義」の再興という時代精神に則して把握する認識があった。しかし革命派の敗北を目の当たりにした彼らは、そのような従来の「革命」への投企を反転し、大正政変以降の日本国内の民主化過程とそれに伴う沖縄人の自己変革を「革命」と名指すことで、かつて中国の「革命軍」に託した自らの思いを受け継ぎ、日本への「同化」のプロセスを「理想」と呼び得るものへと高めんとしたのである。それはいうなれば革命「からの」投企というべき実践であり、そしてそれこそが、この地域において最後まで「日本化」に抵抗していた思想勢力の、中華文明圏からの離脱を決定的にしたのだった。

IV. おわりに——「理想」への同化と東アジアの近代

辛亥革命勃発直前の1911.8に『沖毎』に掲載さ

れた上間正雄の戯曲「ペルリの船」は²³、琉球王国の現状に絶望しペリーの黒船に異世界への希望を託す「青年」の姿を描いている。「でも私には怖いんですもの。私は此の島で求められるもので満足いたします」という情婦の言葉を「此の島に何がある。水々しい少年の心を枯らすやうな習慣と、冷たい道德とがあるばかりだ。その憎むべき習慣も、道德も殆ど北の方から来たんだ。日本(やまと)と云ふこまちやくれた国から来たんだ」(8.5)と一蹴した彼は、「あの船は私を自由の国へ連れて行つて下れるだろう」(8.6)という羨望と、「だがその幸福は夢よりも淡いものかも知れない」(8.7)という不安を共に抱えながら、故郷を捨てた密航者として単身異国船へ乗り込んでゆく。『沖毎』に集った青年たちの内面を、これ以上直裁に象徴化した表現はおそらくないだろう。この時点の彼らにとって日琉同祖論とは、沖縄の「心を枯らすやうな習慣と冷たい道德」の根源が「日本と云ふこまちやくれた国」にあるという悲しむべき事実を示すものに過ぎない。そのような絶望の中で、彼らは二ヵ月後に発生した隣国の「革命」に解放の兆しを求め、それに熱狂し、そしてその失敗によってより深い絶望に沈む。しかしまさにその時、彼らにとって「こまちやくれた国」に過ぎなかったはず「日本」を、「新理想主義」によっても肯定しえるような「新日本」へと転換させる——本当に転換していたのかどうかはともかく、転換しているかのように見せる——契機が訪れた。1912年春の衆議院議員選挙法施行によって沖縄本島は法制的には内地と同一の「立憲国」に組み入れられ、然る後に1913年年頭、首都東京での民衆行動による政権交代という「二月革命」を目撃したのである。

『沖毎』の「青年」たちが不安と裏腹の憧憬を抱いていたのは「ペルリの船」が象徴する理念化された西洋近代であり、そして自らが「立憲国」であることを示すようになって初めて、「日本」

はそのような理念としての近代を引き受ける存在として彼らの眼に映じ得たのである。中国での「革命」に対する温度差にも表れていたように、現実主義的な傾向の強い『琉新』に比して理想に重きを置いていた『沖毎』は、日本への「同化」の肯定に当たっても、単なる事実としての併合状態や日琉同祖論の承認によるのではなく、「革命」として語り得るような理想の実現に向けた過程として「日本化」を選び取るという形をとった——これは、「日本への同化」を通してむしろ日本を超えた「文明への同化」を志向した台湾の事例とも共通し²⁴⁾、そしてそのような「同化」志向に統治者の側が何を以て応えたか、すなわち「立憲国」としての法制度の適用を伴ったか否か、が両地域のその後の帰趨を分けることになる²⁵⁾。

西洋に由来する「立憲国」の理想に到る道のりとして、かつて中国に期待した「革命」を日本への同化に見出す——この過程で初めて、沖縄の青年たちは模範国としても、正統化の原理の供給源としても中国を切り捨て、中華世界から離脱した。儒教的な徳治主義の論理が関係各国の言説を規定していた「琉球処分」の時点では政治的に活用されなかった日琉同祖論は、この時代に「民族統一論」として蘇り、「沖縄人が日本人であること」を事実と倫理の両面から基礎づけるに至る²⁶⁾。しかしながら、やがて中国大陆において「民族自決」や「共産主義」という新たな「理想」の達成が叫ばれ、帝国日本がむしろその「理想」の抑圧者として見出されるとき、再び彼らにとっての「革命」の意味は揺らぎだすだろう²⁷⁾。理念と現実とが東アジアに織りなすその新たな局面については、別稿を期さねばならない。

[注]

- (1) 駒込武『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店、1996、第1章。坂野徹『帝国日本の人類学者』勁草書房、2005、第4章。
- (2) 詳細は、西里喜行「琉球救国運動と日本・清国」『沖縄文化研究』13、1987.2、参照。
- (3) 新川明『天皇と異族の国家 沖縄民衆史への試み』二月社、1973、pp.81-86。森宣雄「琉球は「処分」されたか 近代琉球対外関係史の再考」『歴史評論』603、2000.7、pp.53-54。
- (4) 『伊波普猷全集7』平凡社、1975、p.8（初出は1907.8.1の沖縄県教育会講演）。
- (5) 富山一郎『暴力の予感 伊波普猷における危機の問題』岩波書店、2002、p.122。
- (6) 近藤健一郎『近代沖縄における教育と国民統合』北海道大学出版会、2006、p.27・125。
- (7) 若林正丈『台湾抗日運動史研究』研文出版、1983（増補版2001）、第2篇。
- (8) 小熊英二『＜日本人＞の境界 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮』新曜社、1998、第1章。
- (9) 西成彦・原毅彦編『複数の沖縄 ディアスポラから希望へ』人文書院、2003。なお琉球弧内部の地域差や文化の相違は当然、「近代」や「国民化」の受容にあたってのタイムラグに帰結し得る。例えば拙稿「戦前期琉球弧における「民族」概念の展開」（『沖縄文化研究』32、2006.3）では「民族」概念の普及を事例として、沖縄本島と離島部の差異を論じた。
- (10) 野沢豊「辛亥革命と大正政変」（東京教育大学アジア史研究会編『中国近代化の社会構造』教育書籍、1960）、山根幸夫『大正時代における日本と中国のあいだ』研文出版、1998等。
- (11) 礪波護ほか編『中国歴史研究入門』名古屋大学出版会、2006、pp.246-247。川島真「関係緊密化と対立の原型 日清戦争後から二十一カ条要求まで」（劉傑ほか編『国境を越える歴史認識 日中対話の試み』東京大学出版会、2006）、pp.44-46。
- (12) Rebecca E. Karl. *Staging the World: Chinese Nationalism at the Turn of the Twentieth Century*, Durham and London: Duke University Press, 2002.

- (13) 大田昌秀『沖縄の民衆意識』弘文堂新社, 1967, pp.225-226。
- (14) 比屋根照夫『近代日本と伊波普猷』三一書房, 1981, pp.75-79・116-123。
- (15) 11.5には「文学士白河鯉洋氏談」の記事「清国革命軍と三国志」が内地から転引されているように、これは沖縄に限った動向ではなく、また近代中国における社会変動を担った伝統的要素として「梁山泊」的な中間集団・地域武装集団に注目する近年の見解を考えると、それをオリエンタリズムとして全否定するのも早計だろう。山田賢『中国の秘密結社』講談社選書メチエ, 1998, 野口鐵郎編『結社が描く中国近現代』山川出版社, 2005等。
- (16) つまり安定政権である限りは革命派が勝利しても『琉新』は構わないので、内地の『大阪朝日新聞』では11月下旬まで持続したような清朝への執着や帝政擁護論は見られない。後藤孝夫『辛亥革命から満州事変へ 大阪朝日新聞と近代中国』みすず書房, 1987, pp.18-29。
- (17) 日本内地では例えば徳富蘇峰が『国民新聞』紙上(1911.11.12)で所謂「辛亥革命ペスト説」を唱え、共和思想流入を防ぐための干渉を提言していた。山根, 前掲書, p.8・27。
- (18) 『大阪朝日新聞』では1913.7.24に初めて反袁闘争と護憲運動を並列する記述が出現し, 8.4には南方派に同情的な対支不干渉論が登場, 南京事件(9.1)以降は強硬路線に代わるが袁政権と日本の官僚政治を並べて批判する傾向自体は持続した。後藤, 前掲書, pp.52-58。
- (19) 大田昌秀『近代沖縄の政治構造』勁草書房, 1972, pp.63-64・p.174。
- (20) 同紙の常連寄稿者「赤八巻」が島袋全発であることは, 9.3の「エムエヌ会員東恩納寛仁君に」の記述「赤八巻とは島袋全発の事で濤韻といふ別号を持つて居ます」から判明する。
- (21) 1910.5.31-6.1に同じ『沖毎』に載った「進化学上より観たる沖縄の廃藩置県」に「明治十二年前の沖縄人は、恰もフヂツボの様なものであつた(今尚さうであるかも知れぬ)。実に沖縄人は慶長十四年嶋津[島津]氏に征服されて以来、この政治的圧迫の強い処で安公[全]に生存する為に、その天稟の性質を失つて生氣地ない者と成り了つたのである」とある。『伊波普猷全集1』平凡社, 1974, p.68(ただし表題・表記は『沖毎』版に沿って修正)。
- (22) 喜舎場朝賢の『琉球見聞録』(1914.5)に附した伊波普猷の高名な序文「琉球処分は一種の奴隷解放也」はまさに同月, 6.3-6.4の『沖毎』に転載されたばかりであった。
- (23) 連載終了翌日8.8の『日誌』に「ペルリの船の作者上間正雄君が社に来て…」とある。
- (24) 陳培豊『「同化」の同床異夢 日本統治下台湾の国語教育史再考』三元社, 2001, pp.300-305。
- (25) Rwei-Ren Wu. *The Formosan Ideology: Oriental Colonialism and the Rise of Taiwanese Nationalism*, ph.D dissertation (The University of Chicago, the Faculty of the Division of the Social Sciences, the Department of Political Science), 2003, Chap.5.
- (26) 拙稿「「民族問題」の不在 あるいは「琉球処分」の歴史／人類学」『文化人類学』70(4), 2006.3, および拙稿「「日琉同祖論」と「民族統一論」」『日本思想史学』36, 2004.9。
- (27) 大正後期の沖縄県内における社会主義の台頭については, 比屋根, 前掲書, pp.130-143, 参照。

[付記] 本稿は科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による成果の一部を含むものです。